

8月30日のレッスン

紫布の商人リディア

鍵となる聖句：「また、テアティアラの町に住む、神を敬う紫布の商人リディアという女が、私たちの話を聞いた。主は彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの語ることに耳を傾け、それを受け入れた。」

使徒言行録 16:14

選読箇所：

使徒言行録 16:11-15,40

今日の学びは、ヨーロッパへの福音伝播に関するものです。パウロは最初の伝道旅行の後、シラスと知り合いました。パウロは、シラスを伴ってシリア、キリキア、デルベ、リストラを巡る第二の伝道旅行に出る時が来たと判断しました。これらの地で、彼らは使徒の最初の伝道旅行を通じてすでに主を受け入れていた人々の信仰を強めました。使徒言行録 15:40,41 ; 使徒言行録 16:1,4

この時点までの宣教活動が順調に進んだ後、パウロは小アジアを北と東へと旅するつもりでした。しかし、状況がこの計画に逆らうようになり、ついに使徒は、主がこれらの取り組みを妨げていると結論づけました。ある夢の中で、パウロはマケドニア人のような服装をした男が自分に呼びかけ、「マケドニアへ渡ってきて、私たちを助けてください」と言うのを見た。これを神の導きとして

受け入れたパウロは、直ちに旅立ち、ヨーロッパへと足を踏み入れた。（使徒言行録16:6-10）これこそが、神が御自身の教会のあらゆる事柄を御手配しておられるという、紛れもない証拠であった。

マケドニアの主要都市の一つであるフィリピは、聖書の記録において、ヨーロッパで福音が宣べ伝えられた最初の場所でした。パウロと同行者たちは、城門の外の川辺で、毎週安息日に開かれる小さな宗教的な集まりがあることを知りました。そこは祈りの集まりであり、礼拝と交わりの場でした。そこに集まっていた人々は、全員ではないにせよ、そのほとんどが女性でした。（使徒言行録16:12,13）

その女性たちの中にリディアがいました。今日の鍵となる聖句には、彼女が「神を礼拝していた」と記されています。「紫の布の商人」とは、彼女が染料製造を職業としていたことを指します。古代において染料は非常に高価であり、その製造技術は経済的な利益をもたらしました。このことから、リディアは経済的に余裕のある生活を送っていたと考えられます。パウロの福音の説教を聞いたことで、彼女の心は開かれ、理解の目が照らされただけでなく、彼女は完全に献身して福音に従うよう促されました。そして彼女は、「彼女とその家族」と共に、水による洗礼を受けてその献身を象徴しました。使徒言行録16章14、15節

福音を受け入れた後、リディアはパウロとその同行者たちを自宅に招き、滞在させることで、自分の家と財産を神の奉仕に用いました。彼女はもて

なしを負担とは見なさず、むしろ特権として捉えていました。主の僕たちを受け入れることで、彼女は神を尊び、その地における真理の働きを強めたのです。使徒言行録**16:15**

リディアのもてなしは、謙遜と適切な霊的礼儀を教えています。パウロとその一行は、彼女 とその家族に霊的な教えを授けていたにもかかわらず、彼女に無理に押し付けたり、支援を要求したりはしませんでした。一方、彼女は「もし私が主に忠実であるとあなたがたが認めてくださるなら、私の家にお入りください」と、心から招待を申し出ました。これは、彼女の奉仕への切実な願いと、他人に負担をかけないように配慮したパウロとその一行の慎み深い姿勢の両方を示しています。

リディアの例は、神が、はるかに大きな神の計画の中で、一人の献身的な個人を用いることができることを示しています。これは、主のために行われる誠実な奉仕は、どんなに小さなものであっても価値があるということを私たちに思い出させてくれます。備えられた心、家庭における忠実な影響力、そしてもてなしの心——これらすべてが祝福の通路となり得るのです。